

武蔵野日曜集会

第一の徴

――ヨハネ伝第2章1～11節――

1984年2月12日（武蔵野）

小池辰雄

わが時 行き詰まる時 自然・靈然・神然 無門の門 運命の転換 第一の徴は聖霊のパプテ
スマ 第二の誕生 聖霊を体験し体現しないことにはつまらん

【ヨハネ2:1～11】

1 三日めにガリラヤのカナに婚礼ありて、イエスの母そこに居り、² イエスも弟子たちと共に婚礼に招かれ給う。³ 葡萄酒つきたれば、母、イエスに言う『かれらに葡萄酒なし』⁴ イエス言い給う『おんなよ、我と汝となにの關係あらんや、我が時は未だ来らず』⁵ 母、僕どもに『何にても其の命ずる如くせよ』⁶ 彼処にユダヤ人の潔の例にしたがいて四五斗入りの石甕六個ならべあり。⁷ イエス僕に『水を甕に満せ』⁸ といひ給えば、口まで満す。⁹ また言い給う『いま汲み取りて饗宴長に持ちゆけ』¹⁰ すなわち持ちゆけり。¹¹ 饗宴長、葡萄酒になりたる水を嘗めて、その何処より来りしかを知らざれば（水を汲みし僕どもは知れり）¹² 新郎を呼びて言う、¹³ 『おおよそ人は先ずよき葡萄酒を出し、酔のまわる頃おい劣れるものを出すに、汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり』¹⁴ イエス此の第一の徴をガリラヤのカナにて行ひ、その栄光を顯し給いたれば、弟子たち彼を信じたり。

●わが時

今日はヨハネ伝2章の「カナの婚宴」のところです。この「カナの婚宴」のところは、私は結婚式でも何回か語りました。

1 三日めにガリラヤのカナに婚礼ありて、イエスの母そこに居り、

「ガリラヤのカナ」というのはナザレの東北5、6キロの所です。「イエスの母そこに居り」というので、イエスの母は先に招かれたような書き方をしている。「三日目」というのは、ヨハネ伝1章19節に、「さて、ユダヤ人エルサレムより云々」とあるでしょ。そしてその次に、「あくる日」とあるでしょ。これが二日目です。また、35節に、「あくる日」とあって、これが三日目。43節にまた、「あくる日」とあって、四日目。それから三日目だから、始めから数えるとうちょうど一週間だ。このガリラヤのカナの話は、キリストの伝道が始まってから



ちょうど一週間目ということです。

² イエスも弟子たちと共に婚礼に招かれ給う。

お母さんの方が主客みたいだな。イエスはついたりでもないけれども。

³ 葡萄酒つきたれば、母、イエスに言う『かれらに葡萄酒なし』⁴ イエス言い

給う『おんなよ、我と汝となにの關係あらんや、

ギリシア語では、

「私はお前に対して何だ」

という言い方をした。ヘブライ語でもそうです。「関わりあらんや」なんていう言葉はない。

「私はお前に何だ」

という言い方です。それは日本語としては「関わりあらんや」ですけれども。

我が時は未だ来らず^{きた}』

キリストは聖霊によつてマリヤから生まれた。それで、「何だ」なんていう言い方をしている。イエスというひとは、ではなぜこういう言い方をなさるかという、いつも神の御意を、神の声を聞いて動いているひとだから。神の声が必要ければ、「何だ」というようにはなしです。

「今は神さまの命令がきてないから何もできないよ」

というわけです。

「我が時は未だ来らず」

とはそのことなんです。

「我が時」という言い方はどこどこに出てくる。7章6節でも同じことを言っている。

「⁶ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。』」

とある。また、8節に、

「⁸なんじら祭に上れ、わが時いまだ満たねば、我は今この祭にのぼらず」

とある。そういう「わが時」。それから30節にも、

「³⁰爰に人々イエスを捕えんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する

者なかりき。」

と。「彼の時」、キリストの時。捕まえる時がまだ来ない。手が出ないと。それからまだあるよ、8章20節、

「²⁰イエス宮の内にて教えし時これらの事を賽銭函の傍らにて語り給いしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。」

イエスは捕まる時がちゃんとあるんだ。ユダの背きによつてローマの兵隊に捕まる時がある。それまでは「彼の時」ではない。あれが「彼の時」だった。

「²¹斯てまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わず』」



と。「われ往く」とは、神さまのもとへ往くんです。この「時」というのはヨハネ伝によく出てくる。まだあるんですよ。13章1節、

「^{すざこし}過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して^{きろみ}極まで之を愛し給えり。」(ヨハネ13・1)

「この世を去りて父に往くべき己が時」、これが正に「我が時」なんだ。キリストは時で動いている。17章1節、

「イエスこれらの事を語りはて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う『父よ、^{きた}時来れり、子が汝の栄光を顕さんために、汝の子の栄光を顕したまえ。』」(ヨハネ17・1)

いよいよ「わが時」が来たと。「わが時」とは書いてないけれども、それと似たようなものがある。12章23節、

「²³イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。』」(ヨハネ12・23)

この「受くべき時」。「我が時」は「ヘー・ホーラ・ムー」という。この「時」は「ホーラ」です。ドイツ語でいうと「ツァイト・プンクト」だね。正にそういう時、時刻。時間ではない。潮時だね。

私も八十歳で、いよいよわが時至れりというわけだ。だから、詩作が始まる。

●行き詰まる時

⁵母、僕どもに『何にても其の命ずる如くせよ』⁶と言いおく。彼^{かしこ}処にユダヤ人の^{きよめ}潔の例にしたがいて四五斗入りの石甕^{いしがめ}六個ならべあり。⁷イエス僕に『水を甕に満せ』⁸といい給えば、口まで満す。また言い給う『いま汲み取りて^{ふるまいがしら}饗宴長に持ちゆけ』すなわち持ちゆけり。

これは、「汲み取りて」とあるから、瓶を持っていったわけではない。ちゃんと器に入れて持って行った。

⁹饗宴長、葡萄酒になりたる水を^{みな}管めて、その何処より来りしかを知らざれば(水を汲みし僕どもは知れり)新^{はなむこ}郎を呼びて言う、¹⁰『おおよそ人は先ずよき葡萄酒を出し、酔^{よひ}のまわる頃おい劣れるものを出すに、

酔っぱらっていると分らないから、質を特級酒から一級酒、二級酒にだんだん下げていく。ところが、逆だと。

汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり』

その前の葡萄酒よりもキリストがここで水から造られた葡萄酒の方がなおよき葡萄酒というわけだ。ケタが違う葡萄酒だと。

11イエス此の第一の徴をガリラヤのカナにて行い、その栄光を顕し給いたれ



ば、弟子たち彼を信じたり。

「弟子たち」というのは、この前に出ていたアンデレとかヤコブとかペテロとか、こういう連中です。話はそれだけの話なんです。

葡萄酒が尽きた。

「彼らに葡萄酒なし」

と。人生には、行き詰まる時がある。行き詰まってどうにもならんと。絶体絶命なんていう言葉があるね。まあ絶命まで行かなくていいが、要するに絶する時です。行き詰まり、八方塞がりというやつだ。八方塞がりの時に一角があいている。上が、天界があいている。横は全部塞がっている。行きどころがない。これは同じ二次元だからね。これを三次元の方に、上に向かっていく。これは絶対次元です。二次元ではどうにもならないが、そうしたら上に突き抜ける。今度は絶対次元です。絶対次元の世界だけはいかなる時もあいている。それが本当の宗教の世界です。ところが、行き詰まらないで非常に結構だというのは、今度は逆に上が塞がっている人が多いわけだ。この世では非常に調子がいいとか言ってる。相対的に調子がいいのは、ヘタするところから行きて詰まる。相対的に調子が良からうが悪からうが、行き詰まらうが、この次元だけはあいている。

●自然・靈然・神然

葡萄酒というのは味を持っている。ところが、水は味がない。無色透明。空気もそう。誰も空気は見えない。見えないけれども、空気はある。我々は空気に囲まれて空気を吸っている。実際、一番在るというものは空気なんだよ、我々の生活に一番密着しているものは一番密着しているものだから、かえって分からない。無意識の世界だね。意識のない、やはり無の世界が一番素晴らしいんだ。無意識なんだ。無意識でいいことをしたりね。無意識で悪いことをするようになったらおしまいだけれどもさ。

「お前は私が飢えた時に食物をくれた。渴いた時に水を飲ませてくれた」

「いつ、そんなことをしましたか」

「いや、困った人に、渴いた人に水をやったのは、それは私にやったのだ」

と、キリストがマタイ伝23章で言われた。あの言葉は非常に大事な言葉です。あれは無意識で善いことをしている。無意識で善いことをしているのは、それが天国の人だという。天国人というのは無意識だよ。善いの悪いのという判断を越えた世界で、それが自然、靈然、という世界です。靈然の世界に入る。魂が靈然の世界に入っていたらば、これが本当の天国人だ。

「私はこれだけ善いことしたのに、さっぱり報いてくれない」

なんて、そんなことを考えているうちはまだダメだ。

キリストは「神然」というんだ、私は。靈然のもうひとつ上でもないけれども。「神然」



なんていう言葉は誰もまだつくったことないだろう。こういう言葉が出てくるから、私は不思議でしょうがない。キリストは神然たるひとである。無に徹すると神然になるんです。だから、どんな神学者も私の『無の神学』の書評は書けないですよ。何を言っているんだか分からないというわけで。そういう世界を今に詩で私は書いて表すから。楽しみにしてください。まあ何年先だかわからない。出来上がるまでは絶対に発表しないから。この神然ということ。靈然神然たる世界です。キリストは行き詰まった。むしろ、キリストは、しめたというわけだ。これは神の栄光が現れるぞと。

●無門の門

ここにたくさん花がある。フリージャという真っ白な花。いろんな色が出てくる。しかし、色のもとやはり白なんです。無色の世界。白といっても、本当は無色だけれどもね。白もひとつの色かもしれない。紙でもそうだよな、白い。黒い紙に黒で印刷したってどうにもならない。そういう絶している世界が無色の世界です。

これも無極です。北極だとか南極だとかあるけれども、これは無極の世界です。極が無い。極まると、極まらない世界に入る。極まると、無極の世界に入る。八方塞がりでも極まってしまうと、今度は上に突き抜けてしまう。だから、しょっちゅう上との交流をしていると、今度は八方塞がりをごどこからでも抜けてしまうことができる。靈なるキリストは、戸が閉まっても入ってきた。本当の自在の世界ですね。だから、行き詰まりを知らないというんです、そういう境地になったら。

「我は門なり」

とキリストは言われた。実は、キリストは無門なんです。無門の門という。

「こういう教会でなければキリストは分かりませんよ」

なんていうのじゃない。

「武蔵野召団の集会に来なければキリストは分かりませんよ」

なんていうのではない。どこだっていい。どこにもキリストが「これは門」と言う門がない。ところが、

「至るところこれ門なり」

というんだ、今度は逆に。キリストはどこでも門になる。キリストがあるところは本当の門なんです。それが無教会であろうと、幕屋であろうと、召団であろうと、カトリックであろうと、メソジストであろうと、何だっていいですよ。そこに本当にキリストがあれば、そこが門なんだ。キリストがいなければ、そこにどんなに立派な門をつくったって、それは門ではない。だから、私は

「無門の門」

と言っている。無相の相。キリストは相無き相です。仏教の人たちが私の話を聞いたら驚



くよ、

「なるほど、そういうキリスト教か」

と言つて。もつと限定された何かと思つていゝんだ、仏教の人は。ところがどっこいと。そういう無門の門なんです。

●運命の転換

葡萄酒が尽きた。今度は、キリストはちゃんと瓶に満たした。もちろん、キリストは黙つて神に祈つた。

「葡萄酒になれ！」

と命ずれば、水は葡萄酒になつてしまつた。大変なひとです。本当に大変なひとです。それは創造の力があるからね、キリストは。神さまと同じに。

「その息によつて万物は造られた」

と詩篇33篇にあつたでしょ。キリストの靈氣によつて。それを、「私の信仰は」なんて、信仰を私しているうちはダメなんだ。そういう世界に入れない。それを絶信の信という。上からくるキリストの信が動かしていく。楽でしようがないんです、本当に。

八方破れです。八方破れだから、今度は切り込んでいくことができない。八方破れが一番素晴らしい構えなんだ。全然構えのないのを私は「破れ」と言つていゝんです。無教会なんて、構えがあつて困るよ、ポーズがあつてね。宗教臭かつたり、神学臭かつたり、信仰臭かつたり。ダメだよ、その臭いのは。やつぱり、水のように味がなくならないと。そうすると今度は、本当の味が出てくる。これはキリストは葡萄酒になさつたけれども、味噌汁にもできる。日本人だつたら、緑茶にもできる。素晴らしい抹茶だなあなんて。

9 饗宴長、葡萄酒になりたる水を嘗めて、その何処より来りしかを知らざれば
ば（水を汲みし僕どもは知れり）新郎を呼びて言う、¹⁰『おおよそ人は先ずよき』

葡萄酒を出し、酔のまわる頃おい劣れるものを出すに、汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり』¹¹イエス此の第一の徴をガリラヤのカナにて行い、その栄光を顕し給いたれば、弟子たち彼を信じたり。

「饗宴長はその何処より来りしかを知らざれば」という。料理の長が分からないんだ。水をなめたところが葡萄酒ではないか。この葡萄酒をどうしたんだと。けれども、汲んできたのは分かつていゝんだ。水を満たして汲んできたならそれが葡萄酒だつたという、不思議なことが起きた。

これは、婚宴をキリストは祝福しておられるわけです。預言者もイザヤになると婚宴のことが書いてある。人生で一番華やかな時は婚礼のときでしょうが。ドイツ語で「ホッホ・ツァイト」（高潮の時）という。一番先の徴が婚宴で行われた。婚宴は楽しい華やかな所なんだ、パラダイスだと。極限状況になると、それがキリストを受けると無極限の世界に入る。行



き詰まりが実は一番素晴らしい突破口になる。それを受けとらなかつたら、人生はつまらないですよ。いろんなことがありますけれども、行き詰まつたら、運命の転換がそこに現れてくる。職業の転換が起きることもあるでしょう。いろんな意味において打開されていく。突破されていく。

キリストの中に自分を投げ出す。そうすると、その「第一の徴」の、一体、質はなにかというと、キリストの愛なんです。愛は最大の力を持っている。

「初めに根源愛あり」

ということ。だから、ヨハネ伝の

「初めにロゴスあり」

を、

「初めにパトスあり」

と、私はしてしまった。「ロゴスあり」と「パトスあり」とは同じことなんだ。ゲートルは「エトスあり」「行為あり」と言う。

無味なる水は無限の味を持っている。我々が本当に喉が渴いたときは、アイスクリームではダメだ、水でなければ。本当に喉が渴いたときは真清水に比べるものはひとつもない。この味の無い水が一番うまい。肉体が一番飢えたとき、食べないよりも飲まない方がもつと恐ろしい。というのは、断食して食べなくてもいいよ、でも飲まない断食は非常につらい。それくらい人間の体は水が大事なんだ。90%が水でしょ。水は、本当にいい水は魂のためにもいい。絶妙な味を――実は「味の素」というのは何かというと、本当は水なんだ――皆さんは本当の味の素を毎日持つっている。

その時その時に何にでも変わることのできるもの、これが一番素晴らしい。そういう心境であると、人生は何ごとにも本当に対処することができて、最善が展開してくる。最悪と思つたら、最善になっていく。ブラウニングの言葉に、

「最悪は勇者にとって最善である」

とある。勇者とは、キリストの力をいただくものが勇者です。

●第一の徴は聖霊のバプテスマ

それが第一の徴です。ところでまだ私は言いたいことがある。その「第一の徴」という、皆さんの一番の徴は何かというと、これは魂の転換です。魂の転換、神・キリストへの帰入、これが「第一の徴」、即ち聖霊のバプテスマです。聖霊のバプテスマが最大の徴なんです。聖霊のバプテスマというこの徴を受けとらないと、人生は結局、失敗ということになる。聖霊は何ものとも代えることができない。

「マルタとマリヤ」の話でも、マリヤは一生懸命でキリストに聴いていた。

「これは何びともこれを奪つことはできない。マリヤは良きかたを選びたり」



と。キリストに聴き入って、キリストと一つの境地に入ることが、これが一番凄い世界です。そうしたら、マルタ的な動も素晴らしい動になる。静動一如の世界に入る。マリヤともなりマルタとも自由にならなければダメなんです、本当のマルタにならなければ。

「マリヤは聞いてばかりいて、私はこんなにおもてなしのことをやっているのに、あなたはマリヤに私を手伝うように仰らないのですか」

と、マルタは言った。マルタはお姉さんらしいね。マルタは活動しているのなら、徹底的に活動していればいいんだ、一人で。マリヤが聞いていようが、そんなことは構わないから。そうしたら、キリストは誉めるよ。一人のひとが、ある時はマリヤになり、ある時はマルタにならなければダメです。「マリヤ・マルタ」という、そういう名前をつけてやれよ、誰か女の子に（笑）。どっちかだけではダメだから。「パウロ・ヨハネ」という法王がいるじゃないか。静動両極をちゃんと持っていないくては。「ポラリテート」（両極性）、「テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ」（正・反・合）という。

そういう「メタモルフォーゼ」（変質変貌）を変幻自在に展開するような魂にならないとね。凝り固まって、「こうでなければならぬ」なんていうのは困るよ、そういうのは。早天祈祷だって、深夜祈祷だっていいじゃないか。

「先生は早天祈祷をやらない。あれは少しいかな」

なんて。ちつとも「いかん」ではない。私は私のペースで行っているだけのなし。私だって朝はわりあいに早いんだよ、実は。床の中で祈っている。そういうことで、自在なんです。もう律法の世界を乗り越えている。自在に、天衣無縫的になってくる。

だから、我々にとって「第一の徴」というのは聖霊のバプテスマです。これが本当の徴。私は阿蘇でその「第一の徴」にでつくわした。ガラリ変わってしまった。無教会はサヨナラということになった。可哀相だよな、無教会は。しょっちゅう、聖書のギリシア語やヘブライ語の

「ここはどうだこうだ」

と、そんなことばかりやっている。そんなことで聖書が分かるかというんだ。

それが私たちにとつて、「これは」という決定的な徴なんです。「第一」と言わなくてもいい。決定的な徴です。

「聖霊を持たざる者は、受けざる者はキリスト者にあらず」

と、パウロが言ったとおり。パウロもペテロもヨハネもみんな聖霊がなかった。ところが、キリストからグワーツとひっくり返されて、そうして聖霊が来たら、

「これだっ！」

という世界になってしまった。「これだ」という。これが決定的な徴なんです。

「人新たに生まれずば」

とキリストが言われたのがこれなんです。



●第二の誕生

我々はみんな地上に出てきた誕生日がある。けれども、第二の誕生をしなかったらダメなんだよな。体の誕生ではなくて、魂の誕生をしないとね。魂はいつ誕生したかと、分からない人もある。ハッキリ分かる人もある。まあいいです、道はいろいろだから。けれども「とにかく、聖霊の世界に入ってしまった。ありがたいでしょうがありません」ということになってないかね。

私は、「絶」だとか、「無」だとか、「空」だとか、いろんなことを言うけれども、この絶無的な現実、実は絶妙の現実なんです。キリストが絶妙にはたらいてくださる。だから、行き詰まったら、

「行き詰まった」

なんて思ったらダメですよ。クリスチャンはどんなことがあっても絶対に行き詰まらん。行き詰まったと思ったところに豁然として道が開ける。それにこだわっていたらダメです。私は、

「自分を蹴破って進め」

と言ったでしょ。己を蹴破って行く。

このあいだ学んだところに、

「我に従え」

とあったね。キリストに従う。「従う」と言っただって、そんなに従えやしないですよ、なかなか簡単には。キリストは何と言いましたか。「従う」と言ったときに大事な言葉を言っているところがある。「己を捨てて我に従え」と書いてある。

「己を捨て、十字架を負って我に従え」

と書いてある。

「己を捨てなければ従えないよ」

と言っているんです。

「己を捨てたら、従う主体がないじゃないか。己を捨てたら、どうして従えるんですか。従えじゃないですか」

なんて考えるやつは、それは平面論理のはなしだよ、そういう理屈を言うやつは。そんなことを言うやつは言わしておけばいい。

「己を捨てて、己が十字架を負いて我に従え。己を憎まずば、わが弟子となる」

「ことができない」

と。キリストは自分を憎んでいるし、自分を捨てているひとなんだ。だから、みんなああいう言葉を使っている。自分を何ものともしない。これはもう徹しているんだ、イエスというひとは。父と本当に一つなんだ、全く。それでも人間的な危機性もっている。だから、

「わが意にあらず、汝の意を」



と言って祈っている。我々と同じ弱さも持っている。

「私たちが思いやることができる」

とへブル書に書いてある。全然ケタ違いで、泣いたり笑ったりすることがなかったら、キリストは化け物になってしまうよ。では、

「己を捨ててと言ったって、私たちはなかなか捨てられないじゃないですか」

と。キリストは、

「私はお前を十字架で捨てた」

と言われる。私たちは十字架で捨てられているんです。世に捨てられ、私は無教会に捨てられました。無教会に捨てられるよりも、私はキリストに捨てられたんだ、十字架で。旧き私は捨てられていて、新しき私は拾われているんだ。人に捨てられるよりか先にキリストに捨てられてある。キリストは、

「ダメだよ、古いお前なんか捨ててしまえ。私が十字架で捨ててあるよ。心配するな。」

しかし、新しいお前を聖霊においてやってあるよ」

ということです。それは十字架が負えるんです、今度はその聖霊の力で。己を捨てると――キリストによつて私たちは己が捨てられていますから、従来 of 己というものは捨てられあるから――今度はキリストに拾われているんです。聖霊で拾われている。これが十字架を負つてキリストに喜んで従っていくんです、従う力が来ているから。力が来ないで、従えるものか。冗談じゃないよ。力んでいたら今にくたびれてしまう、そんな従い方をしたら。なぜ、くたびれないかというと、キリストの力が来ているからくたびれない。眠くはなるよ。

だから、何でも楽しいんです。楽しい。楽音^{らくいん}なんだ、福音でなくて。

「あの人はあんなにいろんな事にでつくわして艱難があるのに、なぜ、ニコニコしているんだろう」

と。女の人^{おんな}が本当にいろんな苦難にあつて、ニコニコしているくらい麗しい姿はないですよ。

その従うことが、楽しく進むことになる。

「私（キリスト）と一緒に、今日も明日も次の日も進みゆくなり」

ということになる。

●聖霊を体験し体現しないことにはつまらん

今日も来ていただきたい人が幾人かいるんだけどね。なぜ、来ないんだろうね。日曜は来ないではいられないという気持ちにならなければうそなんだ。私はお説教しているんじゃないんだから。皆さんと一緒に凄い世界に入ろうとして展開しているんだ。何がなんでも来ないではいられないという気合を持つていなかったらダメです。それはどうしても来れないことはありませんよ。それは仕方がない。けれども、そうしたら、そこで本当に自



分で聖書を読んで、その中に入っていかなくては。日曜は、私はもう毎回、前進しているんだ。停滞していないですから。

「第一の徴」、決定的な徴が聖霊であるということは今日初めて言ったんです、このところを学びながら。この徴を体験し体現しないことにはつまらんです、クリスチャンなんて言っただけ。レッテル・クリスチャンになってしまふ。この徴を受けたら、今度は、本当に一年に一人はひっくり返すように連れて来なさいよ。逃げて行っただけで何だっていいから。

「来りて見よ。こういう世界があるんだぞ」

と。私は自分がないから、ハッキリ言えるんです。それでなければ、福音なんか説きません。キリストを告白しないではいられないから、地上の生涯終わるまで。

いつかもお話したかもしれないけれども、お母さんがお味噌汁をつくりそなたで味がうまくない。子供が、

「どうか、神さま、このお味噌汁をちゃんとした甘い味に直してください」

と祈ったら、そういうように直ったという話だ。これは本当の話だ。信州にあった話で、私は石垣会の人に聞いた。そういう世界です。

いや本当に幼児というのは純真ですからね。幼児を見ると、分裂がない。とやかく考えるほどダメになってしまう。

「我思うゆえに我あり」

なんて大間違いだ、デカルトなんか。

「われキリストに貫かれたり、ゆえに我あり」

「われ捨てられたり、ゆえに我あり」

という世界だ。そういうのが本当の「絶対矛盾の自己同一」というんです。この世の論理じゃない。西田さんの哲学のあのへんを読むと、「無の自覚的限定」なんて非常に素晴らしい。禅宗であろうと、日蓮宗であろうと、浄土真宗であろうと、福音はそれらの境地はもつと高次の意味で全部持っています。だから、ああいうものを全部読めるんです。普通のクリスチャンには読めないですよ、この境地に入っていないと。福音はそれ以上の世界なんだから。一切を包摂する。

それはもの凄いのを私は書いてみせるから。そんなことばかり言っているね（笑）。だから、楽しくてしょうがないんだ、私は。では、今日はそのへんで。おしまい。

